

その朝、あたしは自分の命について考えた。

この命は、きょう尽つきるのだろうか？ それとも、運よくこの戦いを生きのびることが
できるのだろうか？

あたしたちは、前進の命令がくだるのを待ちつづけていた。待ちきれずに、不平をいう
声がしだいに大きくなっていく。

「進軍だ！ ハーキマーの命令があろうとなかろうと！」

ジョンが、不安そうな顔を近づけてきた。

「ハーキマーが前進したがらないんだ。臆病風おびやまかせに吹かれたという者もいるし、おれたちが
皆殺みなころしになるのを心配してのことだという者もいる。ハーキマーは、待ち伏せぶに会うのは
確実だと思ってるようなんだ。ただ、それがどこだかは、わからないらしい」

「あなたはどう思うの？」とあたしは聞いた。

「ハーキマーには経験がある。おれたちより……」

ミラーが口をはさんだ。

「そのことは、おれたちの心配することじゃない。ズイー、とにかくきみは列のうしろへ
行くんだ。きみの父さんもそうだっただろ？ できるだけ急いでうしろへ行つて……」

「臆病者おびやまものになれって？」とあたしはいいかえした。

そのとき、とうとう男たちの一団が前進しはじめた。ミラーが立ち上がる。ハーキマー
将軍があわてて進軍の命令をだすと、たちまち男たちはみな、将軍を待たずに森の中をか
けだした。

ミラーはあたしをせかして、兵隊たちとは反対方向に走り、後方の荷車の列のところま
でつれていった。そのひとつの荷車の御者台ごしやだいにあたしを押し上げると、台に手をかけて
いった。

「ズイー、きみの父さんは正しい。きみは、生きのびなくちゃいかん。たとえ、おれたち
が死んでも」